

岐阜大学 学生会員 ○西慎太郎
岐阜大学 正 会 員 出村嘉史

1. はじめに

大垣市安八郡墨俣町は長良川の右岸に位置しており、東には揖斐川、北側には犀川をはじめとする支派川がある。墨俣はこれらの河川に囲まれた輪中である。墨俣は昭和初期の河川改修事業によって町の中心部の移転を余儀なくされ、町の構造は大きく変化した。この時代の構造変化は現在の町の骨格となっている。本研究では各種文献・計画書・計画図・地図等を用いて事実検証を行い、町の構造変化を読み解く。これにより大規模インフラ整備事業の影響を受けた町の変容形態を明らかにすることを目的としている。

本研究では以下の史料を取り扱う。町史・事件史工事概要・当時の新聞等では工事までの流れや出来事が記されており、時代の流れや工事・出来事の大まかな概要が把握できる。計画図・地図・絵図等からは場所・地形や町の変化を読み取ることができる。また、県や町が出した文書等や筆者による住民に対してのヒアリングも当時の重要な史料・情報として位置付けている。

2. 昭和初期の墨俣周辺におけるインフラ整備

明治20年に木曽三川の抜本的な治水対策として最初の工事である木曽川下流改修工事が着工され、大正10年には木曽川上流改修工事が着工された。また同時に内水問題を改善させるために支派川改修工事の必要性が示された¹⁾。この工事の1つに町中に河川を新設し、従来より下流部で内水と本川とを合流させる計画があった。これに反対した関係町村の住民と警察とで衝突し、激化したことで軍隊が出動するほどの暴動になった。その後、何度か計画案が変更され、改修による影響を受ける町の範囲が縮小し、改修工事が容認され着工された。

(1) 犀川改修事業

改修工事以前では洪水の際に長良川からの逆流によって排水機能が失われ、本巣郡諸村は甚大な被害を受けてきた。この治水対策として (i) 各支派川の流路の整備 (ii) 河道を掘削して流積の拡大 (iii) 堤防の強化 (iv) 本川との合流地点の樋管の建築 (v) 水路を新設し本川との合流を下流で行う。これらが支派川改修工事の計画であった。この計画の (v) の内水を速やかに排除させるため、支派川を一つにまとめ墨俣を始めとする安八郡諸村に水路を新設し、長良川下流部に合流させる計画があった (図-1²⁾)。これが犀川改修であり、この計画段階で、下流部の墨俣を始めとする7町村の町村長等が辞表を提出するなどして反対運動を行っていた。



図-1 犀川改修計画平面図

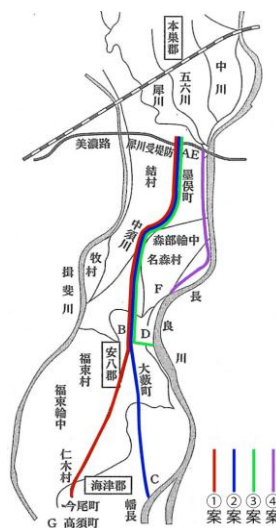


図-2 犀川改修計画案

(2) 犀川騒擾事件

内水問題を解決したい本巣郡諸村と、水路を町中に新設することによって水害の危険が増加し、移転を強いられた安八郡諸村とで対立していた。双方の協議により図-2³⁾中の①案を②案へ、②案を③案へと若干の計画修正はあったが、和解することはなかった。しかし、内務省直轄の工事ということもあり、同意が得られぬまま改修工事が進められた。警察官と住民とが衝突し、激化したことで軍隊が出動し、暴動は鎮圧された。結果的に①～③案の安八郡の中央を貫通させる案から、④案の長良川沿いに水路を新設する案に変更されたことにより収用する用地が最小限に押さえられ、工事の直接的な被害を受ける地域が縮小された。また、幹線道路敷設工事が計画されていた矢先であったため、道路敷設と引き換えに改修工事を容認するという意見も見られた。

(3) 岐垣国道改築工事

昭和初期、犀川改修事業と同時期に国道敷設工事が計画されていた。この国道敷設計画は、岐阜市と大垣市を結ぶ国道は幅員が狭く屈曲も多く見通しが悪い。東海道本線と平面交差になっている。岐阜市～大垣市間にある長良揖斐の二大川に架かっている橋梁はいずれも老朽化している。これらの現状の解決を図るものがあった⁴⁾。また、当時は第一次世界大戦後の経済界の不況によって、失業者が増加していた。昭和5年、現在の県下における失業者は5121人であり、そのうち救済を必要とする失業者は3200人余であった。これらの救済事業として一般失業者でも容易に就ける道路改築事業を興し、岐垣国道改修工事と長良大橋工事とが岐垣

国道改築工事として施工された（図-3⁴⁾）。

3. 犀川改修後における墨俣の変容

犀川改修工事による移転が行われる以前の墨俣は川町（川端町）といった、町役場をはじめとする銀行・郵便局・派出所・神社・料亭・商店・住宅・渡船場が立ち並び、墨俣の中心市街地であった⁵⁾。しかし、犀川改修工事による移転が昭和6年に開始され、川町は姿を消すこととなった。これにより役場・派出所・家屋は新たに生まれた栄町に移転を行い、郵便局は本町へ移転を行った（図-4⁶⁾）。この移転によって新たに西殿町・東殿町・栄町が形成された（図-5⁷⁾）。また、渡船場は長良大橋が架設されることによって、河川を渡る手段が舟運から陸運に移り変わり、廃止された。

岐垣国道の敷設により舟運から陸運へ移行し、新たに墨俣が形成されていった。現在、墨俣の住民の方へのヒアリングから犀川改修が完工、岐垣国道開通後、墨俣は毛織業等が盛んになり、殿町も料亭や芸妓がいる花町として盛り上がったと記憶に残されている。

殿町は移転後から昭和45年（図-4⁶⁾）までの間に形成されている。この特徴として花町である殿町は住宅地と隣接していることが挙げられる。昭和22年の地図（図-5⁷⁾）では改修工事・国道敷設後に殿町は形成されていない。しかし、昭和10年の写真（図-6⁸⁾）では移転直後に形成されていることが確認でき、土地台帳等で昭和30年代の利用も把握できている。

4. 終わりに

中心市街地であった川町は犀川改修による移転で姿を消すことになったが、岐垣国道敷設により新たに町が形成され、墨俣の新たな中心市街地や花町が全く新しい区画として町並が形成されたことが把握される。一方で、その間の意思決定や集団移転の手続きなどは明らかになっていない。しかし、比較的近い過去であるため、町に入り情報の聞き取りを行う。こういったヒアリングした結果と地図等を比較し、整合をとることで明らかになると考える。この市街地形成の過程を正しく理解することが、今後の町づくりの指針を考える上で重要になるだろう。

参考文献

- 1) 木曾三川治水百年のあゆみ編集委員会『木曾三川治水百年のあゆみ』建設省中部地方建設局 H7.3
- 2) 岐阜県「犀川改修計画説明概要」 S5.11
- 3) 犀川騒擾事件史編纂委員会『犀川騒擾事件史』 S46.1
- 4) 岐阜県土木課長 櫻井哲三「岐垣国道改築工事概要」土木建築工事画報第12巻第2号 S11.2
- 5) 墨俣町制100周年記念写真集編集委員会『写真で見る明日のすのまた』墨俣町 H6.11
- 6) 地理調査書『墨俣町』S22第2回修正測図同29資料修正 S29.9.30 発行
- 7) 国土地理院『岐阜西部』T9測量 S45改測 S47.4.30 発行
- 8) 内務省名古屋土木出張所「岐垣国道 空中ヨリ見タル墨俣付近」 S10.3

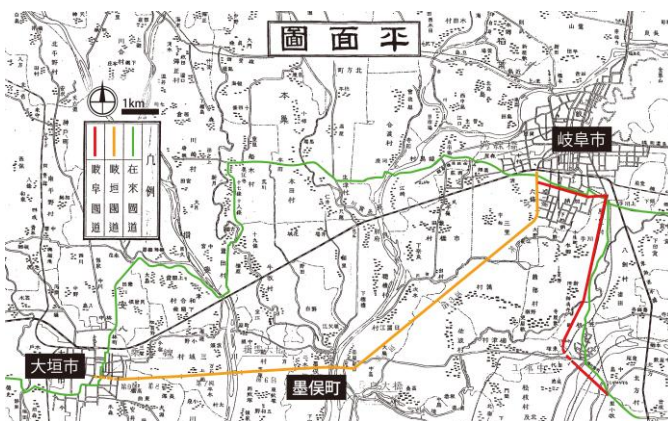


図-3 岐垣国道改築工事平面図

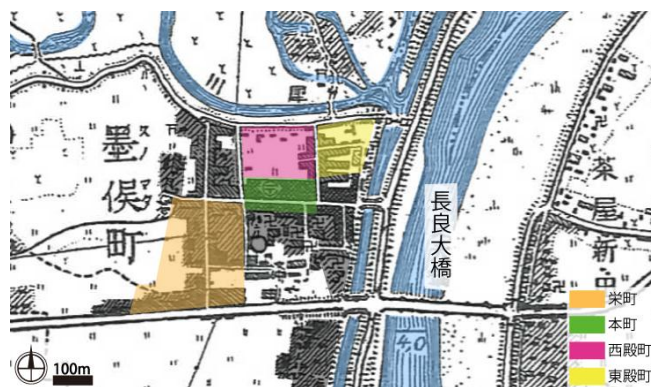


図-4 昭和22年 墨俣町測量図

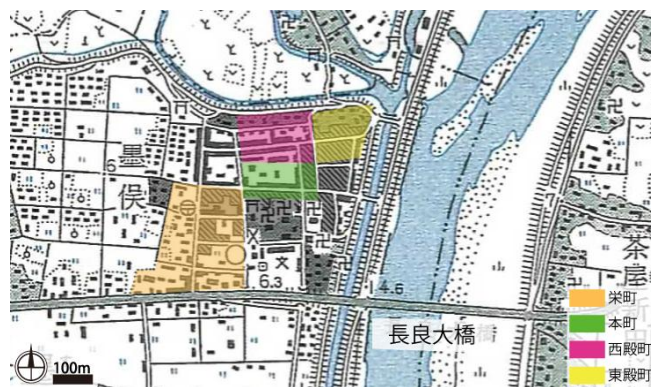


図-5 昭和45年 墨俣町測量図

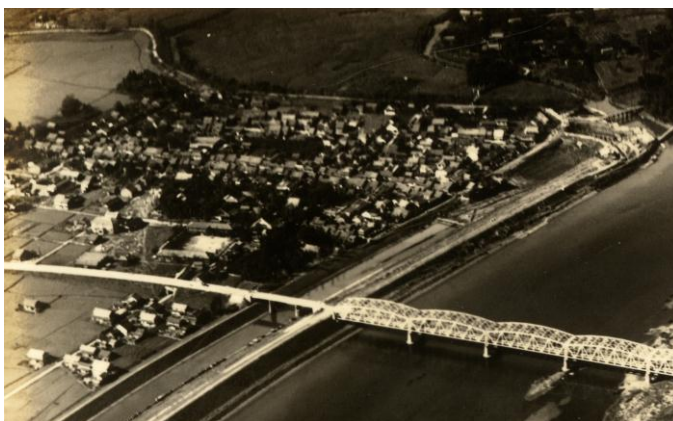


図-6 岐垣国道 空中ヨリ見タル墨俣付近